

第拾壹夜



青行燈

あおあんどう



燈あかりきえんとして又あきらかに
 影かげ憧々としてくらき時
 青行燈といへるものあらはるゝ事ありと云
 むかしより百物語をなすものハ
 青き紙にて行燈をはる也
 昏夜に鬼を談ずる事なかれ
 鬼を談ずれば怪いたるといへり

—今昔百鬼拾遺／中之卷・霧
 鳥山石燕（安永十年）

1

私には、きょうだいが居た。

そんな——気がするのだ。

そんな気がするとは、何ともあやふやな云い様ではあるのだが、そう云う以外にない。
 わからない、からである。

否、判らないことはないのだ。私には兄も弟も、姉も妹も居ない。嘗て居たと云う事実もない。居た痕跡もない。戸籍の上でも、私は独りっ子である。

それでも、何故かそんな気がしてならない。

その昔。

私は戸籍の自分の名の横に別の名前が記載されてはいはしないか、ことある毎に、そして無意識の裡に確認してしまったものだ。謄本だの抄本だのが必要になる機会と云うのはそれなりにあるから、私はその度に確認した。

幾度覽ても書類上私の父母の子は、私だけだった。

後は空欄なのだ。除籍や抹消の形跡は一切ない。但し書きも何もない。綺麗なものだ。臆しと雖も、公の書類なのであるからいい加減な記され方をしている筈もないのだし、剩る度に内容が変わっていることなど、あり得よう筈もないのだけれど——。

それでも覽てしまう。

戸籍を疑う訳ではない。我が目を疑う訳でもない。そこに何も書かれていないのは怪訝しい間違っていると、そんな風に強く思つて覽ていた訳でも、決してない。

何も書かれていないことは最初から判つている訳で、それでも半ば習慣のように目が欄を追つてしまうと云うだけのことなのである。予め知つていることなのであるから、ないと確認した処で取り立てて落胆することもない。

ただ、ほんの僅かの違和感が、心の隅に生じたと云うだけのことである。

私に兄弟姉妹は居ない。居ないと云うのに戸籍を見る度に微かな齟齬を覚える。それだけだ。

その小さなしこりこそが、そんな気がすると云う云い様の正体である。些細な誤謬なのだ。勘違いか、思い込みか、妄想か、そう云つたものなのかもしれない。

そうなのだろう。

結婚した際に分籍し、私は戸主となった。父も母も鬼籍に入った。そのしこりを意識する機会も減り、それは徐徐に私の中で萎縮して行つた。

だが、羨みはしたのだけれど、消えはしなかつた。気にする頻度は減つたものの、どれだけ馬齢を重ねても、消えることだけはなかつた。

そして、人生の盛りを過ぎ、不惑を過ぎて、その、長年私の胸中に巢喰つていた小さなしこりは、朦朧とした不安へとその姿を変えたのだつた。

きょうだいが居る、居ない——そんなことは既にどうでも良くなつてゐる。否、どうでも良いと云う以前に、私にきょうだいは居ないのである。それは厳然とした事実なのだ。

ならば。

何故、そんな気がするのか。

私は頭では解つてい乍らも、心の隅ではその事実をどうも受け入れていない。矮さくなつたと云うものの、私の心には依然しこりがあるのだ。つまり私は、未だ何処かできょうだいが居ないという現実を拒絶してゐるのである。

それはどうしてなのか。

勘違いだとするなら何をどう勘違いしたのか。

思い込みであるなら、如何にしてその思い込みは生じたのか。

妄想であるのなら——。

如何なる妄想なのか。

そんなことが気になるようになった。

もしや、己は精神や神経に変調を来しているのではあるまいか。そうでないなら、或いは、何かを——それも大きな何かを、忘れてしまっているのではあるまいか。ずっと、忘れて続けているのではないのか。

そう考えると不安になった。

だが、そんな愚にもつかぬ、取るにも足らぬ不安など、毎日の暮らしの中に於ては埋没させざるを得ぬ些事となるだろう。実際、しなければいけないことと云うのは来る日も来る日も山程にあつて、それを遂行しなければ生きては行けぬのだ。帳簿を付けたり電話を掛けたりに人に会つたり、否、それ以前に靴を履いたり飯を喰うたり寝たり起きたり、そうした当たり前のことをすることこそが第一であり、芒とした想いの優先順位などは、著しく低いのである。

十や二十の童ではないのだ。

私は、充分に老いている。

だから、そんなことで揺れている余裕などない。私は日に追われ、不安を無視して暮らしていたのだ。ただ暮らして行くだけでもそんな状況であつたと云うのに——。

騒乱があつた。

それは大きな騒動だつた。

人が亡くなっているし、世間的には所謂殺人事件でもあつた。

私は、その事件の半は当事者として数日を過ごしたのだ。当事者と云つても、事件の現場に居合わせたと云うだけであるから、関係者と呼んだ方が正しいやもしれぬ。容疑者候補でもあつたのかもしれぬ。拘束され、事情聴取を蜿蜒とされた。

世間は豪く騒いだようだが、そう長い時間を掛けずに事件は解決した。解決はしたのだが、関係者の私をしてもそれが果たしてどのような解決であつたのか、定かではない。結果的には殺人事件ではないと判断されたのだつたか。但し、結果がどうであれ期間がどうであれ、大きな騒ぎであつたことは間違いないし、その騒ぎが私の生活に多大なる影響を及ぼしたことも間違いなかつた。

事件そのものはいい。きちんと決着がついたのであるから構わない。

私はその事件の中心人物に関わる仕事をしてきた。今もしている。事件が起きてしまった所為で、私の業務は通常の数十倍に膨れ上がってしまったのだ。幸いにも納期がある類の仕事ではなかつたから一日の仕事量が格段に増えたと云うことこそなかつたのだが、処理しなければいけない案件は膨大な量となり、複雑さも増した。

私の仕事は、或る人物の資産を管理すること、そしてそれを適切に運用すること——である。と、云つても、単に素封家に雇われた監事と云う訳ではない。

或る人物とは元伯爵、つまり旧華族である。現在彼と戸籍を同じくする人物は誰も居らず、従つて彼の資産とは、即ち彼の家——旧華族家の資産なのである。

私は、旧華族家の所有する総ての財産の散逸を防ぐためにその分家一同が設立した、さる団体の役員なのである。

団体の名は、由良奉賛会と云う。そう――。

一時世間を騒がせた、呪われた伯爵家――由良家の財産管理こそが、私の仕事なのである。

公卿華族の大半は貧しい。国の中枢に御座す一握りの方を除いて、殆どの生計は苦しいと聞く。財産がある者はそれを喰い潰し、事業を興せば失敗する。労働経験がないのであるから、これは仕方がない。歴史と誉で腹は膨れないのである。労働経験がないと云う意味では大名も同じなのだが、土地等を所有している分、まだましだったようである。

ただ、由良家の場合はやや事情が特殊である。

分家親類が起業し、皆成功していたのである。

明治の半ば過ぎ――儒学者だった由良本家の先代公篤卿は、その親類一同から多額の借財をし、驚く程便の悪い僻処に驚く程贅を尽くした館を建造した。それに関して由良公篤なる人物が果たしてどのような腹積もりであったのか、そこは全く判らない。

その土地に由良家の先祖が遺した財宝が隠されているのだなど云う冗談のような流言蜚語も真しやかに囁かれたらしいが、云うまでもなくそんな話は絵空事である。

そんなものはなかった――のだろう。

由良家には、天文学的な額の借金と、本家分家間の修復し難い確執だけが残った。

だが、その本来返せぬ筈の借金は――奇跡的に――程なくして綺麗に返済されてしまったのであった。

博物学者と云う、これまた金儲けとは凡そ縁のない職種であった先代行房卿が、金満家の令嬢を娶ったことが幸いしたのである。とは云え、その金満家に肩代わりをして貰ったと云う話でもないものであった。婚姻が成った後、細君の係累が次次に死に絶えて、莫大な資産や権利がそっくりそのまま由良家のものとなった――のだそうである。

当時の帳簿を閲覧限り、動産不動産を含め、相当な額である。複数の会社や店舗も由良家の所有する処となった。

これを、このまま泥溝に捨ててしまつて良いものか――分家親類一同はそう考えたのだ。普通の感覚で捉えるなら一生かかつても使い切れぬ程の額面である。だが、由良家の場合は違うのだ。儒学であれ博物学であれ、凡そ浮き世離れたことに遣つてしまう。学問だろうと道楽だろうと傍目には変わりが無い。それは、浪費でしかないだろう。代代社会性が皆無の家系であるから、会社や店舗もともに経営出来るとは思えない。浪費を止めることが叶つたとしても、増やすことは金輪際出来ぬ。

これでは宝の持ち腐れである。

のみならず——再び没落されてしまったりしたなら、迷惑を蒙るのは分家一同と云うことになる。ただ見守っている訳には行かぬ。そこで、協議の結果由良家とは血縁関係のない縁故の者を中心にして作られた資産管理運用代行組織が由良奉賛会——なのだそうである。凡て戦前の話である。私は当然、聞かされただけだ。

今にして考えてみれば、少少怪訝な話のような気もする。華族制度も廃止され、爵位も威光を失ってしまった現在に於ては、いずれ時代錯誤の感は否めまい。だが。

時間と云うものは何処も同じように流れる訳ではない。

由良家の時間は止まっていた。最初は、私も随分と戸惑ったものだ。

私は、本来華族とは何の関わりもない。平民である。裕福でもなかった。所謂苦学生だったのである。卒業後に有徳商事という商社に就職し、兵役に取られていた時期を除いて、十年勤めた。

戦前は掃除夫に毛が生えた程度の仕事しかさせて貰えなかったが、復員後は経理を任されて、懸命に職務を熟した。

仕事以外は趣味も取り柄もない男だったから、石部金吉の如く働き詰めた。それだけである。

だが、その結果、私は会長の目に留まった——らしい。

有徳商事の会長——創業者は、由良家の先代公篤卿の末弟であり、由良分家会の筆頭でもある由良胤篤氏だったのである。私は胤篤氏の推挙に依り、有徳商事から出向する形で由良奉賛会の理事となったのである。

そして私は、時の流れが違う場所があることを知った。

一日は一日、一年は一年なのだけれども——彼等の百年は私達の一日にも満たない。そんな気がした。

因みに、胤篤氏は幼い頃——由良家が叙爵を受ける前に分家の養子になっているため、旧伯爵家の人間ではない。養子に出された段階で華族でもなくなっている。

その所為なのかどうか、胤篤氏はどうやら私と同じ時間を生きている。良い云い方をすればなら気さくで商売熱心と云うことになるし、悪し様に云うなら強欲な俗物と云うことになるのだろう。

しかし私は、由良家とその眷族達の込み入った事情は何も知らずにいたから、まるで単純に、胤篤氏も旧伯爵家の一員なのだと思ひ込んでいた。だから私は当初胤篤氏をそう云う人の基準として捉えていたのだ。公家だ華族だ伯爵だと云ってもまあこんなものかと、正直高を括っていたのである。

だが、由良本家のただ一人の当主——元伯爵は、まるで人が違っていた。彼は、要するに生活者ではなかったのだ。

慥かに、彼のような人種に大金を預けるのは問題だと、私は真剣に思い案じたものである。

世俗と隔絶した元伯爵と、世俗の塊の如き会長の間で均衡を取り乍ら、私はよたよたと職務に励んだ。金勘定をしている分には華族も平民もない。そこが救いだつた。それでも慣れと云うのは恐ろしいもので、数年を経て私はすっかりその奇異な感覚に馴染んでしまつたのだつた。

そして、事件は起きたのだ。

均衡は、がたがたと崩れてしまつた。

2

どうしました平田さん、と男は云つた。

私は僅かの間、自失していた。

「額面はそれで宜しいでしょうか」

「あ——いや」

能く見ていなかった。慌てて明細に目を投じたのだが、それは明細書と云うよりも既に台帳であり、しかもその台帳が何冊もあるのだから、直ぐに細かく確認をすると云う訳にもいかぬ。そのうえ、そもそも相場と云うものが判らない。

判りませんと、正直に云つた。

「定価——のようなのは、この場合何の目安にもならない訳ですね？ まあ、そもそも百年からかけて蒐めたものですから、貨幣価値——と云うよりも単位自体が変わっていますでしょうし、定価自体現在の価格に換算せんとはいかん訳で」

それは余り意味がありませんと男——古書肆は云う。

「定価は売り手が付けるものです。製作原価に手間賃等を加え、それを上回る代金が回収出来ないのであれば売る意味がない。下代に希望する利潤を上乗せしたものが売り値になりません。それが、まあ定価です。一方僕等古書肆は、買い手が望む価格を先に考えなくてはならない。この場合、原価はありません。また、買い手が定価より低い評価をしているのであれば、低く見積もらなくてはなりません。想定される売り値から希望する利潤を差し引いた価格が、買い値です。その明細に記してある金額は、そうした金額です」

なる程、発想が逆なのだ。

「古書売買に於ては減価償却と云う考え方が通用しない局面が多いのです」

「古道具とは違う、と云うことですか」

古道具は概ね新品より安くなる。

使用した分、傷んだり減ったりしているからである。五年使用したものより十年使用したものが価値は下がる。

ええ、古道具とは違いますねと古書肆は云った。

「どちらかと云えば茶道具に近いでしょうか」

「確かに、目の前に居る男の出で立ち、業者と云うより茶の湯の宗匠のような印象ではある。しかし、これは単に彼が和装だと云うだけのことで、つまり私の偏見思い込みの類なんでしょう。」

「なる程、古いから安い、汚いから安い、そう単純なものではないということですね。機械的に値付けが出来る訳ではない——と」

「勿論傷んでいるものは綺麗なものより安くなりますが、傷んでいて尚それなりの価値が付帯することがある、ということですね」

「その辺は美術品と同じと考えれば宜しいのですか？ 要するに書画骨董——のようなものと云うことでしょいか」

朴念仁の私には縁遠い世界であるが、茶碗一つ軸一幅が何万何十万、時にそれ以上の値が付くことがあると聞く。

「正確には骨董とも違うのですが——」

落ちていた声である。商談向きだ。

「本には様々な価値が纏わり付いています。書画骨董同様に美術品の価値もある。美しい装幀、美しい装画、物体として芸術品扱われる品もある。また、稀少価値と云うものもあります。発行部数が極端に少ない、或は多くが散逸してしまい市場に流れない、そうした本は高値になりがちです。同時に歴史的価値と云うものもあるでしょう。古くなれば、大した本でなくてもそれなりに値が付く。しかし、そうした価値を凌駕するのが」

中身です、と古書肆は云った。

「中身？」

内容——と云うことだろうか。

「役に立つことが書かれているとか、その、文学的に優れているとか——いや、私は文学芸術方面はからきし不得手なのですが、何か、そう云う」

文学的価値はまた別です」と男は云った。

「ドフトーエフスキイの著作物は古書と雖も一定の需要があります。しかしドストーエフスキイの名著だからと云ってそれだけで値が釣り上がることはありません。名作とされるものの方が駄作とされるものよりは売り易いと云うだけのことですね。ただ、名作か駄作かを決めるのは読者で、読者の基準は必ずしも一定ではありませんからね」

そんなものだろうか。

「偉い学者先生や批評家なら兎も角、内容の善し悪しなどは一介の古本屋に決められるものではありませんからね。文学者が文学的価値を認めなくても、読みたいと云う人が一人でもいるなら、業者にとつてそれは商品なんです。僕はあくまで需要と供給を天秤に掛けて、適性な値付けをするだけです。善し悪しを決めるのはお買い上げになったお客様です」

「では、中身と云うのは？」

読めるかどうかと云うことですよと云って古書肆は微笑に笑った。

「本は飾っておくものではなく読むのですからね。出来不出来や善し悪しは別にするとしても、中身があつてこそではあるのです」

「それはそうなのでしょうが——」

「鱈の詰まり、何が書かれているか、それから何時、誰が書いたのか——そうしたことの方が美術的な価値や稀少価値などよりも重要になってしまふと云うことです。例えばその辺の八百屋の御主人が一念発起して半生記を記し、まあ十部程刷ったとしましょう。これは、その八百屋さんを知っている人にとつては大層面白い本なのかもしれない。御家族には宝物かもしれない。でも世間的には無価値でしょう。絶対的価値の問題ではないのです。どんなに安くても、赤の他人で買ってくれる人は——まずいでしょうね」

いないでしょうねと答えた。

「まあ、お話を聞く限り、買う方に多少なりとも欲しがらる気持ちがあつて、その気持ちと価格が見合うかどうかは値の高低と云う判断を導き出すのでしょうかね」

ええ、と古書肆は首肯く。

「しかし、その八百屋の親爺さんが、大変な名文を書かれていたとしたら如何です」

「いや、それでも買わないでしょう。名文かどうかは読んでみるまでは判らない訳でしょうしねえ。無料であつても、まあ私なら持つて行きはしませんね」

「そうですね。しかしそれを読んだ何方かが深い感銘を受けたとしましょう。彼はそれを人に貸したり、公の場で絶賛したりするかもしれない。そうすれば何人かは興味を持つでしょう。この場合は大勢である必要はありません。五六人が興味を持っただけで、もう」

「ああ、足りなくなりますかね」

「ええ。十部しかない訳ですから、欲しい人全員には行き渡らない可能性がありますね。どうしても手に入りたいと云う人が残部の冊数以上いた場合、争奪戦になるかもしれない。入札のような展開になった場合、こちらに値を釣り上げる意思がなくても、顧客側が値段を上乗せしてしまう訳ですね。いや、その程度なら大したことはないのですが、罷り間違つてその八百屋の親爺さんが後に高名な文筆家になってしまつたりした場合、これは——」

大変な稀観本きかんぼんになってしまいますと古書肆は云つた。

「その場合、相当な値が付くことになる。値段は元値よりずっと跳ね上がってしまうことになります。時に法外な金額にもなります。無料でも持つて行かない筈の本が定価を遥かに上回る高値で取引されることになってしまふ訳です。でも、そうした事情、市場の動向を知らない人にとっては、まあ」

それでも紙屑かみくずなんですと云つて、古書肆は台帳のような明細書を示した。

「骨董だと目利きの鑑定次第で相場が動きますが、古書の場合はそうもいかない。本の価値と云うのは、非常に個人的な基準で決まるものなのです。誰かが良いと云つたから価値が高まると云うようなものではありません。新刊の場合は評判だけで売れるようなこともあるのでしょうか、評判だけで買うような人は、古書は買つてくれませんか」

いづれにしても客次第、と云うことなのだろう。

「まあ、顧客層が変われば、機械的に値付け出来てしまうような状況も発生するかもしれませんし、読書という行為が一般化すれば古書売買の在り方も変わるのでしようが——」

読書は一般的な行為ではありませんかと問うと、一般的な行為なら本はもつと売れていまして古書肆は答えた。

「本邦の人口を考えてみて下さい。各世帯が一冊ずつ購入したなら新刊の部数は千倍万倍になりますよ。そうなれば出版会社は我が国の経済を担う一大産業になり代わつてしまいます。僕だつてもつと胸を張つて道を歩ける。読書家、愛書家と云うのは現状、逆も特殊な人と考えるよりないのです」

「そうなのでしよう——ね」

本など読んでいてはろくな者にならんと、慥たしかかに私も云われたものだ。その場合の本は娯楽小説に限つたことではなかったと思う。例えば物書きは男子一生の職に非あずと云うような風潮は、戦前ではごく普通に謂いわれていたことなのである。

「僕等古本屋はそうした特殊な方だけを相手に商売をしています。この明細書に記された額は、そう云う奇特な御仁達が消費してくれるだろう予想金額を基にして弾き出した金額です。勿論商売ですから、先に申しました通り手間賃を引いてあります。その金額にその手間賃を足した額が、販売価格です。ですから、我業者を通さずに直接彼等にお売りになれば——もう少し高く売れます」

「はあ——」

「我我も生活が懸かっています。買い値に上乘せをして販売するのでなくては食の計となりません。上乘せは、一割増しの時もあれば五割増しの場合もある。我我の乗せる額より低い上乘せ額で捌けば、買う方は安く、売る方は高く取引を成立させることが出来ます」

「ははあ。つまり私どもは卸し問屋と云うことになる訳ですか。上代ではなく卸し値で販売すれば、と云うことですね」

資産の管理運用とは、即ち元金を遣うこと、そして増やすことである。その所為か、物を売って利を生むという当たり前のことを私は忘れかけている。

「しかし、私どもには売る手段がない。伝手もないです」

「買い手の目星は付いています。既に交渉もしています」

「そうなのですか？」

ええと云って古書肆は積まれた明細を示す。

「これだけの量ですからね。しかも稀覯本が多い。今回は同業者十三人の協力を仰いで整理にかかりましたが、整理するだけで十四日もかかってしまった。あれだけの品になると仮令十四分割しても——引き取れないのです。僕達のような零細業者には、由良家の蔵書総てを買い取るだけの資金力がないと云うことです。ですから、高価な品だけでも予め買い手を探しておかなければいけなかったのです」

「こんなに早く見付かるものですか」

「先程も申し上げましたが——」

幸い顧客が特殊な方方ですからと、和装の男は笑った。

「愛書家は耳聡いですしね。喜ばしいことに、高価い順から買い手が決まり、現状で三割程は売約済み状態です」

「品物も見ずに決めたのですか——」

私は再度明細に目を投じた。書籍の値段とは思えない桁の数字が目に入った。

「こんな高価な買い物？」

「そう——信用だけで先払いを強いるには気が引ける金額なのです。ですから、もしその明細金額で御諒解が戴けるようでしたら、先に搬出作業をさせて戴きたい訳です。お客様に確認して戴きたい。但し、そうした事情ですから、そちら様が直接取引を御希望されると云うのであれば、買い手の方方を御紹介することも可能です」

「それは」

「如何します」

「ちや」

そして私はあの、膨大な本の壁を思い起こす。

何万冊あるか判らない。数えるだけで気が怪訝しくなりそうだ。

否、想像しただけでうんざりする。

「営利目的ですることではありませんから。利幅は関係ありません。それに、私はあなたを信用している。安く買い叩くような真似をする方とは——思えませんからね」

由良本家の当主は、事件を契機にして所有する一切の権利を放棄し、土地家屋を含む総ての財産を処分することを決めたのである。使用人には相当額の補償金を渡し、残りは然るべき先に寄附すべし——と、当主は宣言したのである。

つまり。

由良奉賛会も解散、と云うことになる。

だが——事態はそれ程単純なものではなかった。

煩雑な事務処理手続きの山が、私を待っていた。だから私にとってあの事件は、終わってから始まったようなものだったのである。

後始末は大変だった。

月並みな云い方なのだが、一言、大変だとか云いようのない状況だったのだ。

書類上の手続きで済む類のことはまだ良かった。計算したり申請したり許諾を得たり捺印したり、そうした処理には慣れている。専用の人員も居る。私を悩ませたのは、先代が建てた館と、その館に収められている家財一式の処理だった。

百年からの時間が堆積している。

館の裡は時の進みが違っていているから、中に居る分には能く判らないのだけれど、外の世界に照らす時、その裡に収められているものは悉く、突如として時間経過の重さに晒されるのである。

調度備品は引き取ってくれる業者が見付かった。だが。

最初に私を困らせたのは先代が蒐集した膨大な量の剥製だった。学問的に貴重と思われる品は大学や博物館に寄贈することを考えたのだが、先ずどれが貴重なかが判らない。売却するにも何処が買ってくれるのか見当も付かない。

識者を頼んで選別して貰い、一割程を数箇所に寄贈し、結局残りは廃棄した。良く出来ていても塵芥なのだ。

そして、次に私の頭を悩ませたのが、三代以上に互って集められた、数え切れぬばかりの書籍——だったのである。

全部廃棄してしまおうか、とも思った。剥製同様、苦勞して引き取り手を探しても一割程度しか捌けぬのではないかと考えたのだ。しかし、どうやらそうではないらしかった。

事件に関わった古書肆の言を信じるならば、売れぬ本は一冊としてない——らしかった。

もし売れずとも、大学や図書館など引き取り手は幾らでもあると云う。そこで私は、その古書肆——中禪寺秋彦に蔵書の処分を一任したのだった。

凡てお任せしますと答えた。

「聞けば、素人に値踏みは不可能であるように思えます。細かく纏めて戴きましたのに目も通さずに判を押すのは失礼な氣もしますが——これで結構です」

合計金額は考えていたものよりずっと多かつたのだ。それに——。

これで儲けた処で、全額寄附してしまうのだ。慾を出す意味はない。中禅寺は有り難う御座居ますと云って、ゆっくりと頭を下げた。

「一兩日中に搬出の手筈を整えて御連絡を致します。御入金の方法や期日は、その際に」

いや、と中禅寺は顔を上げた。

「いや、その前にもうひとつ御相談があります」

「何で——しようか」

「売れないものがあります」

「それは——値が付かぬもの、と云うことですか」

「そう云う訳ではありません」

「では——買い手が居ないのですか」

「それも違います。例えば研究者なら欲しがるでしょう。現に欲しいと云っている者も居るようです。資料的な価値は非常に高い。ただ、これは——どうなのでしょう」

中禅寺は眉を擧げた。

そして一枚の紙を出した。

「一覧を作っておきました。ここに記した五十冊は、市販された商品、所謂書籍ではありません。平たく云えば由良家の記録——と云うことになるでしょうか」

「個人的な記録——と云うことですか」

「ええ。日記のようなものです」

「それは」

そもそも古本屋が扱う品ではないのではないか。日記帳の類までが商品になってしまってもなのだろうか。

「それは、先程の八百屋の喩え話と一緒にではないのですか」

日記など誰も買いません。しかし古書肆は首を振った。

「いいえ。一緒ではありません。この文書を記されたのは公家であり一時は明治政府の中枢にもいらつした由良公房卿、そして明治の儒学者として名を馳せた孝悌塾塾頭、由良公篤卿、更には大正時代に幻の博物学者と謳われた由良行房卿です。これは、まあ歴史的研究資料、思想的な研究資料足り得る一級品の古文書と云うことになるのです」

「古文書——ですか」

そうなのだ。

館の裡ではただの日記でしかなくとも、外に出したなら古文書なのだろう。

「江戸末期から大正にかけての公卿華族の直筆文献ですからね。欲しがる人は居ますよ。ただ、これは由良家の私的記録でもある訳ですから——当然、公開非公開の判断は子孫であり所有者である現当主がされるべきことでしょう。ただ、御本人がその権限を放棄されると仰せなもので——」

ややこしいことになってしまいましたと中禅寺は云った。

「何もかも総て処分すると云うことで請け負ったものですから、同業者は他の文献と同列に扱ってしまったのです。買い手との交渉前に僕が気付いて、取り敢えず押さえおいたのですが——扱、これは如何致しましょうかねえ」

「それは——」

私が判断すべきことなのだろうか。

髓かに、財産の処分は塵一つに至るまで任されている。

土地も調度も衣類も裝飾品も、有価証券も会社も何もかも私が処分した。だが——。

——想い出は財産なのだろうか。

想い出ではないのか。歴史なのか。能く判らない。

想い出ではありませんと、私の心中を見透かしたかのように古書肆は云った。

「記録は、記憶ではありません」

「そう——なのでしょうか」

「ええ。言葉に置き換えた途端に、体験は物語に姿を変えます。書き記された記憶はもう本来の記憶ではありません。どれだけ客観的に、或いは事務的に書き記したとしても、それは事実ではない。現実には決して書き記すことが出来ないのですよ、平田さん」

そんなものなのか。

「例えばこの明細には書名と、ごく簡単な書誌、状態、そして金額が書き連ねられています。出来得る限り正確に記しましたから間違いは少ない筈です。しかし、これはあの膨大な書籍そのものではない。全く、何も表していません。質感も匂いも重さも美しさも、何も判らない。この明細を作るためにした苦勞も、喜びも、何も判らない筈です」

「御苦勞をなされたのだろうな、と云うことくらいは想像出来ませんが」

正直それがどの程度の苦勞なのかは計り知れない。喜びとなると、もう想像すら出来ない。本を整理することに喜びなどあるのだろうか。遣り遂げた際の達成感のことなのか。

でも僕には判りませんと中禅寺は云った。

「僕は現場に居ましたからね。記憶がある。その明細を覽れば、一冊一冊を思い出す。重さも、匂いも、質感も、頁を開いた時のわくわくする気持ちも、文字を追う愉悅も、何もかもが——思い出せません。これが想い出です。記録は、現実でないだけでなく、想い出でさえありません」

「その、想い出を綴ったものでもですか」

嬉しかった楽しかった辛かった悲しかった、そうした気持ち綴っても、それは想い出ではないのか。

違いますと古書肆は云った、

「言葉や文字は、それ自体では何も表せません。言葉は空気の振動に過ぎません。虚空に向けて発せられた言説は、どれだけ重要な意味を持つていたとしても風の音と同じく無意味なものではないでしょう。文字もまた、ただの記号でしかありません。文章は記号の羅列に過ぎない。いや、書かれただけでは記号としても成り立っていない。文章と云うのは、どうであれ不完全なものなのです」

「何か——足りないのでしょうか」

「先程も申し上げましたが、書物の価値は読めるかどうかで決まります。そして真価を定められるのは、読んだ者のみです。つまり、書かれたものは普く——」

読まれなければいけないのですと、本屋は云った。

「読む者が居て初めて文章は完成するのです。記号を読み解き言葉を理解した者の内部でのみ、物語は生まれる。言葉は発する者と受け取る者が共犯者になることで、漸く意味を成すのです。だから同じ文でも読む者に依って立ち上がる物語は違います。一冊の書物は、読まれた数だけ別の物語を生むのです。ですから、どれだけ緻密に丁寧に、微に入り細を穿って想い出を綴ったとしても、書き手の想い出は——」

「読まれた段階で読み手の物語になってしまおう、と」

その通りですと中禅寺は云った。

「それ以前に——書き記した段階で想い出は物語になってしまっているのでしょうか。書いた文字を最初に読むのは、文字を書いた人間です」

そうか。そうだろう。

「いざれ記されてしまったものごとは現実ではないのです。寧ろ、出来るだけ主観を排除して記録された——その明細のようなものの方が、想い出には忠実なのです。但し、想い出を持った者が縮く場合に限るのですが」

この——中禅寺は紙を示す。

「由良家の記録は、歴史家や好事家にとつては恰好の研究資料となるでしょう。しかし、彼等に想い出はない。彼等の多くは——書いた人物と面識さえないでしょう。彼等の中に生成される物語は、彼等のものです。結果、貴重な発見なり見識なりが彼等の中に立ち上がることもあるかもしれないですが——でも、由良家縁の方がお読みになった場合、それは矢張り少し違ったものになるように思えましたもので」

由良家の人間——。

ただ一人残った、由良本家の当主。

「伯爵は」

由良家の現当主は伯爵と呼ばれている。正確には元伯爵なのであるが。

「伯爵はその文書をお読みになっておられるのでしょうか」

「判りません。ただ、僕の感触では、半世紀は緋かかれていないのではないかと——と」

では、読んでいないのだろうか。書物に囲まれ、書物に埋もれ、書物に育てられたような人なのに。祖父や曾祖父が自ら記した文献だけは読んでいなかったのか。

私は考える。

私は、自分の戸籍を目にした際、果たしてどんな物語を生み出していたのだろうか。もしかすると——。

私は再び上の空になった。

3

私が、諏訪にある由良胤篤氏の別宅に赴いたのは、秋も深まった頃のことである。

二月近くを費やした残務整理も大方が終わり、愈々由良奉賛会も解散出来る運びとなったのだ。出向と云う体裁だったから、私は遠からず有徳商事に戻ることになるだろう。

報告と挨拶と、そして今後の指示を仰ぎに、私は由良一族の長老であり有徳商事の会長相談役である胤篤氏の許を訪れたのであった。

由良胤篤と云う人は、人品骨柄物腰思想、何処を取っても何処から見ても根っからの商売人である。凡そ公家の血を引いているとは思えない人柄なのだ。おまけに齡八十を越して尚、老人は元氣であった。見た目も矍鑠としており、且つ言動も精力的だ。戦後会長職に就き一線を退きはしたが、系列会社の長達は今以て胤篤氏を頼りにしている。老人は時に厳しく冷徹で、また聡明であり、奇抜な発想も持っていた。

そう云う意味で由良胤篤は、正に相談役と云うに相応しい人物なのであった。

良い意味でも悪い意味でも怪物的——それが、私の彼に対する率直な人物評である。

その胤篤氏が――。

体調不良を訴えたのは、あの事件の後、暫くしてのことであつた。鬼の霍乱かくらんと誰もが云つた。ただ、事件の前後ずっと彼の近くに居た私には、何となく解つた。

身体の問題ではないのだ。心の問題なのだ。心と云うより気力と云つた方が良いだろうか。気力が殺そげる事件だつたのである。事件後、老人は多分とぶ十は老け込んだ。老け込んで見えた。思うにそれまでが異常だつたのだろう。この萎なえ方こそが本来の、齡相応の在り方なのだ。八十年ぴんと張り詰めていた糸が緩んでしまったのだと、私は勝手に思った。

胤篤氏は凡百職務から一時身を引き、別宅で静養すると宣言した。環境を変えたかつたの
だろう。

老人の別宅は諏訪湖が望める閑静な場所にあつた。

電話も引いていない、正に閑居である。

税理士と弁護士を一人ずつ同行させた。謁見えつけんをしたがる者は多かつたのだが、人数は最低限に絞つた。

人に会いたくないと、胤篤氏は言っているらしい。

らしい――と云うのも、直接連絡が取れないからである。

電話などなくて当然と思つていたのだが、なければならぬ不便なものだと私は知つた。電報だの書面だのでは、どうも伝わり難いむづかいことと云うのはあるのだ。

人に会いたくないと云う老人の気持ちだが、どのようなものなのか、或はどれ程のものなのか、私には察することが出来ない。声が聞けたなら、まだ解つたのかもしれないのだが。

その昔は、電話の如きもので意志の疎通など計れはしないと考へていたのだが――。
いつの間にかそう思わなくなつてしまつたのだろう。

私は、中禅寺の言葉を思い出す。言葉と云うものは何を伝えられるのか。言葉からは何が汲み取れるのか。

車窓から遠い山並みを眺める。

信州は――山深いと、能く他国の人は云う。私はそうは思わない。

山は慥たかに沢山ある。それはどれも険しい山なのだけれど、私には山の中で暮らしていると云う認識はない。山は、私にとって監獄の壁のようなものだからだ。

私は、筑摩野の出身である。

盆地と峡谷で構成される土地は夏暑く冬寒い。そして、周りは山だ。山ばかり見える。幼い頃、あの山は多分決して越えられないのだと私は思い込んでいた。その所為か私は、どこか故郷に牢獄めいた印象を持っているのである。

私だけの印象だとは思ふけれども。

だから――諏訪湖を初めて見た時、拓ひらけていると感じた。

妙な感想である。

初めて諏訪湖を目にしたのはいったい幾歳の頃のことだっただろう。

何時のことなのかは全く覚えていないのだけれども、そう感じたことだけは明瞭に覚えている。

何かから解放されたような気分になったのだろうか。大きな水を湛えた美しい湖を目にして、山に閉じ込められた囚人は解放されたような錯覚を持ったに違いない。

諏訪湖などそう遠くはないと云うのに。

だが、仮令近くとも行くことは稀だったのだ。用もない。今と違って、昔は物見遊山に出掛けることなどはなかったのである。だから、他の人はどうか知らぬが——否、多分私だけのことなのだと思うのだけれど——私にとっての諏訪湖は、手の届く処にある、それでいて聖地めいた場所ではあったのだ。

それ以降、長じてからも、私は諏訪湖には解放があるのだと何となく思い続けている。初見時の衝撃と云うのは、後を引くものなのだろう。しかし。

そうした記憶は、私だけのものだ。

中禅寺の云う通り、諏訪湖と云う記号からそうした感興を得てしまうのは——得ることが出来るのは、きっと私だけなのだろう。

だからと云って、諏訪湖は私にとって特別な場所であると記述してしまうと——それはどうも違うとしか云いようがない気がするのだが。

いや、そんなことはないのだ。

取り分け特別の場所だと云う想いはない。

諏訪湖で何をしたら何があったと云う具体的な記憶も殆どない。諏訪湖を訪れたから何かが変わったとか、何かが始まったとか、そうしたこともない。そこは、他の多くの場所と同じ、ただの場所ではないのである。

なる程、記憶は記録出来ないものなのだ。

言葉にするなら、凡ては物語になってしまふのである。

自動車の扉を開けただけで、もう肌寒かった。書類に数字を書き込んで判を捺して、判を捺して数字を書き込んでいるうちに、季節は巡ってしまったのだ。当然暦の上では知っていたのだけれど、私はその時初めて季節を体感した。

目的地は割と高台にある。湖は慥かに能く瞰えた。

矢張り、解放されたような気持ちにはなっていた。

そして私は何故か、居る筈のないきょうだい——多分いもうと——のことを、胸の端頭の隅で思い出していたのだ。

胤篤氏の別宅は、思ったよりもずっと質素なものだった。

和洋折衷のモダンな建物ではあったが、新しくはない。建てられた当初はさぞや目立っただろうと思うが、今となつては寧ろ地味に映る。

胤篤氏は、前に会った時より更に衰えて見えた。幾分、瘦せたのかもしれない。

半日かけて細かな報告をした。老人は言葉少なに、しかし熱心に説明を聞いてくれた。大方の説明を終え、辞去しようとする^と止められた。

帰りの足は用意するから一人だけ残れ、話があるから一晩泊まって行けと、胤篤氏は云った。慥かに私は奉賛会解散後徳商事に復職することになる訳で、契約しているだけの税理士や弁護士とは立場が違う。

仰せの通りに致しますと答えた。

事務局と自宅への連絡を頼んで、私は二人を帰した。

暫く事務的な話をした。

夕食後、酒宴になった。

宴と云っても老人と二人切りである。メイドは通いで、住み込みの賄いが一人残っているだけだった。

平田、平田君と、胤篤氏は私を呼んだ。名を二度呼ぶのがこの老人の癖である。

「お前は——何年勤めた」

「奉賛会に出向して六年です。有徳商事に奉職致しましたのが昭和十年のことです。出征しておりますから、二年ばかり中抜けしておりますが」

「すると十八年も経つか。お前、幾歳だ」

「四十一です」

「儂の半分だ」

老人は籐の椅子に身を沈める。

「儂は明治六年に生まれた。生まれた時は華族だったんだ。三つの時に養子に出されて、それで華族じゃなくなった」

だから何だと云う話だがなと、老人は頬の皺を深くした。

「儂の実父てえのは——この間お前がくれた、それ、その古文書を書いた男だ」

老人は書き物机の上を指差した。

中禅寺に貰った由良家の文書五十冊が積んであった。

「由良公房。駄目な男だったよ。儂は公房の末子でな。長兄の公篤に——これが書いたもんでも交じっておったがな、その公篤に長子が生まれたのを契機に養子に出された」

兄弟が多かったのだと老人は云った。

「儂の養父つてのが、その公房の弟だ。だから、まあ同じようなもんだわな。皆由良だ。だが、華族は本家だけだ。儂が出されてすぐに叙爵があつて、まあ本家は伯爵家だわな。つうても叙爵内規に外れた扱いだったからな。皆——」

爵位泥棒と呼んだわいと老人は何処か自虐的に云った。

その話は何度か聞かされている。

「養父と云うのが口の悪い男でな、本家のことをいつも口汚く罵っておった。僕はそれを聞いて育つておるから、もう公家だの華族だのと云うのは莫迦なもんなだと、そう思い込んでおったわ。実際——」

莫迦だつたらうと、老人は私に問うた。

首肯することは出来なかつたが、否定もしなかつた。

「あの——莫迦な、城みたいな館が建つた時、僕は十四だつた。あれがまあ、証拠だ。兄の公篤も、甥の行房も、全く以て莫迦だつた。まるで社会の役に立たん。自立も出来ん。僕は本気で蔑んでおった。そのつもりだつた。だがなあ」

嫉妬はしていたのだろうさと、胤篤氏は彼らしからぬ口調で云つた。

「嫉妬ですか」

意外だつた。

勿論、それらしい素振りには窺えたり、世間的にはそう見えたのだろうとも思うが、本当にそうだつたとしてもこの人は口が裂けても云うまいと、そう思つていた。

「劣等感のようなものはな、あるさ。今じゃ華族制度もなくなつたが、当時はな、まだ徳川時代を引き摺つておつた。四民平等なんて云うが、僕の生まれる寸前までは四民がくつきり分かれておつたんだ。身分違いは不可侵の区別だつた。急に廃止されても戸惑うわ」

その感覚は解る。

方針が変わるのは致し方ない。変わるには変わるだけの理由があるのだろうし、決まりであれば従うよりない。ただ、理屈は兎も角、感情の方は中付けて来るものではない。

先日、米国人と商談をした際に私はやり切れない尻の据わりの悪さを感じたものだ。悪意も何もないのだけれど、数年前までは憎むべき敵だつたのである。好きとか嫌いとか云う前に、私はどこかで怖がつていた。勿論、契約書にそんな気持ちは綴られていないけれど。

人は差別したりされたりしたがるもんなだと老人は云つた。

「だから、それまでの身分の違いがな、要は華族制度に拘り変わったのだな。途端に養父は差を付けられた。兄と弟と云うだけで身分の外に放り出されたんだから拗ねもするわ。そもそも養父に嫉妬があつたんだ。僕は、それをそっくり引き継いだ。実父でもないのに——僕は養父の複製のようなものだ」

くだらぬよなあと老人は云う。

「しかし会長、そうは仰いますが、会長は身を立てられ一代で財を成し、ご立派にやつてこられたではありませんか。気弱なことを仰らないで下さい」

「身を立てるの財を成すの、そんなことは当たり前のことだよ平田。余りが多いか少ないかどうかだけだ」

「余り——ですか」

「お前だつて立派に生きておるじゃないか。つまり生きるだけは稼いでおるんだ。それ以外が——余りだろ。金持ちつてのは余計な金持つてる奴のことだ」

金はある限り偉くないと誰かが云うておつたわいと、そう云つてから老人は泣き笑いのよ
うな顔をして笑つた。

「金が——偉くないのですか？」

「遣わなきや紙屑だ——と、まあそりゃあそうだわな。由良本家の連中は、己の食い扶持す
ら稼ぐことをせなんだ。だから莫迦だ。でもな、食い扶持よりも多く稼ぐが偉いかと云え
ば、そんなことアないのだ」

同じように莫迦だよ平田と老人は云つた。

「変わりないのだ。五十歩百歩だ。いか平田。平田君。儂は悔いのない生き方をして来た
つもりだよ。神懸けて世間様に恥じ入らにゃならんようなこともしておらん。でもな、悔い
るつもりになれば悔いばかりだし、恥じようと思えば恥ばかりだ。そんなものだよ平田君」
酔っているのだろうか。大して飲んではない筈だが。

「現実には、過ぎ去ればな、現実じゃなくなるんだ。だから語りようで如何とでもなる。自慢
も悔恨も、語りようだ。同じ話が何方にでも転ぶ。そう、昔と云うのは」

話なんだよと老人は云う。

現実じゃないんだ。話は。物語なのだ。

昔は物語になつてしまふのですねと、私は中禅寺の受け売りのようなことを云つた。老人
はそうそう、物語だなあと嘆くように答えた。

「長く生きるとな、平田、平田君。昨日が増えるんだ」

「昨日——ですか」

「そう。明日と云うのはな、未だないんだ。ないもんは零だわ。ないんだからな。しかし昨
日は済んじまつてる訳だから、まあ——あつたのだからよ。一日経つと昨日は一つ増える勘
定だ。生まれて八十年も経つんだからな。二万九千から昨日があつたことになるだろう」

まだ増えるわと老人は云つた。

「生きてる限り増えるんだ。昨日は。だが昨日は今日じゃないのだ。当たり前だがな。昨日
なんてものは目の前にはないだろう。現実だつたというだけで、もう現実じゃないのだよ」

「そう——かもしれせん」

「儂は」

幽霊を見たよと老人は云つた。

「幽霊——ですか。そのお話は」

「ああ、勿論それは幽霊なんかじゃあなかつたのだ。でも見間違ひでもなかつたし、現に見
たことは見たのだ。そして儂は長い間、実に五十年も、ずっとそれを幽霊だと信じて暮らし
ておつたのだ。この場合、どうだ」

どうだ——とは。

「そうなら、それは幽霊なのじゃないか」

「違つたのでございましょう」

「違つたのさ。幽霊みたいなものではあつたが、幽霊なんかじゃなかつたよ。でも、それが幽霊じゃないと儂が知つたのは、つい何箇月前のことだよ平田、平田君。当然、その事実を知つて以降の儂は、あれを幽霊じゃないのだと思つて今に至つておるわい。だが、それ以前の、一万八千幾日かの儂は、それを幽霊だと思つて生きておつたのだ。仮令真実がどうであれ、その過去は変わらんのだ。違つか？ この場合それを幽霊だと信じて生きていた儂の昨日は——全部間違ひなのか？ 全部嘘なのか？ そうなら、儂の五十年は」

なかつたも同然だと老人は云つた。

「昨日なんて、どうせ話だ。お前の言葉で云うなら物語じゃないか。現実でないなら——嘘も間違ひもないのじゃないかとな。そう思うようになったのだ」

そう。

物語なら、虚実はどうでも良いのだ。

「儂はなあ」

あの女性が好きだつたのだよと、由良胤篤はまた彼らしからぬことを、天井を仰ぐようにして云つた。

「こんな皺くちやの爺イが児童のようなことを云うと笑うておるんだろがな。まあ可笑しいわな。儂も自分で可笑しいと思つて。でも、そうだつたのだから仕方がない。彼女はしかし、甥の妻だつた。儂が嫉妬していた、華族様の、本家の嫁だつたのだよ。これはもう、どうしようもない。だから儂は二重に、三重に、幾重にも——」

由良を嫉んでおつたのだと云うと、老人は徐に酒器を手にした。私は慌てて酒精を注ぐ。

「その女性が死んでしまつた。そして、死して後に、儂の前に現れた。それは、幽霊でなくちやいかならう。幽霊だつたのだよ。いやいや、幽霊なんかは居らぬさ。そんなものが居るんだと信じておる者ア、相当の愚か者だろよ。儂も鼻で嗤うてやるわいな。霊だの何だの、そんなものは屁の突つ張りにもならんわい。だがな、幽霊が居らんのは、此の世だ」

「此の世——ですか」

「此の世だよ。現実世界さ。まあ、今そこに」

老人は窓を指差す。

「そこにな、死んだ筈の誰かが立つておつたと。それが見えたと。こりや、間違ひなく見間違ひじゃ。そうでなければ幻覚だよ平田。平田君。そうだろう。死んだ者がほいほい出て来る訳はないのだよ。もう居ないのだ。それを、幻覚でも見間違ひでもないなんて云い張る奴は、神経か何かがイカしておるのだ。此の世に幽霊なんか居らぬわ。でもな」

昨日だつたら如何だろうと老人は云つた。

「昨日——とは」

「昨日はな、平田。もう現実じゃないのだよ」

「ああ——」

そうか。物語なのか。

「嘘も実もないのだ。見間違いも勘違いも、何もかも、全部同列だ。現実でないのなら、幽霊も居るだろうさ。此の世でないなら」

あの世だからなと老人は云った。

「妙なことを云うと思っているな」

そう云ってから老人は杯を空けた。注ごうとすると手を翳された。

そのの文書を読んだんだ、と老人は云った。

「甥が書いたもんは量も少ないし、まるで読む気がせんのだが、親父と兄貴が書いたもんは気になってな。ここ暫く、ずつと読んでおったのだ」

「あの——古文書ですか」

由良家の家長達が記した——日記だ。

「遠い昔のことが記されておったよ。何と云っても最初は江戸時代だからな。でもな、平田君よ。それでも書いたのは儂の親父なのだよ。そして兄貴なのだよ」

そうか。

この老人には記憶があるのだ。他人にとってはただの物語だが、この人にとっては特別な物語なのだろう。

「由良公房——儂の親父は、どうやら魔物の子であつたらしいよ」

「魔物ですか？」

噂だつたそうだがなと老人は云った。

「由良家の長子は人の子に非ず——そうした流言蜚語が根強く囁かれていたのだそうだ。なら何の子だ、と云うことになるわいな。何だ、あの葛の葉ちゅう劇があろうよ」

「安倍晴明でしたか」

「あれは狐の子であつたな。どうもな、儂の親父の母親と云うのは青鷲だつたんだそうだ」

「青鷲とは、鳥の——ですか」

「そう。青い、青い鷲だよ」

胤篤氏は杯を置き、古文書の方に顔を向けた。

「親父は三度程、生みの母の青鷲に遭うておるらしい。可笑しいわな。作り話だわな。あり得ないだろうそんなこと。誰だつてそう思うさ。子供だつて信じないわい。常識があればな。でもな、平田」

これは昔の話なんだよと老人は云った。

昔——話か。

「江戸時代にはそんな非科学的なことがあったんだとか、そう云う話じゃないのだ。江戸だろうが平安だろうが、ないものはない。あり得ないものはあり得ない。天然自然の理と云うものは、こりゃ天地開闢以来、ずっと不変のものだろうさ。でもなあ平田。これはな、昨日と同じなんだ。現実じゃないのだよ。儂の——幽霊と同じなのだよ」

「物語なのですな」

「物語なのさ」

そう。嘘も実もないのだろう。

「家系図のようなものも書かれていてな、慥かに儂の実父の母親の名はないのだ。一方、養父の母は、まあ今で云う後妻として記されておる。だが、正妻の処は空欄なのだ」

——空欄。

なのか。

何も書かれていないのだと老人は云う。

「儂はなあ、平田。どうやら、青鷺の孫なのだ。笑えるであろうよ」

「笑う話ではないではありませんか」

「いや、これはな平田、儂にとつては出自を語る大切な物語だが、お前なんかにとつちゃあ与太話だよ。それでいいのだよ。お前がこんな非合理的話を真に受けるような男だったなら、まあ雇ってはおけぬわ」

そうなのだろう。

私は、この老人の昔に割り込めはしないのだ。

「まあ、歴史家や何かがこの古文書を読んだなら、この空欄を必ずや人の名で埋めるだろう。まあ、記せぬ事情がある女だったのだろうと、そう考えるだろう。例えば、身分が低い女であったのだとか、何か裏があるんだとか、そう云うことを考える。もしかしたら——何処の何方か、探り出して来るかもしれないわい。それが普通だな。だが」

儂は。

儂だけは。

この空欄を青鷺で埋める。

「現在、青鷺の血を最も強く引く生き残りは、この儂と云うことになるからな」

そうか。

空欄は。

埋めてしまえばいいのじゃないか。

老人は笑った。

「儂の親父はな、人の尻馬に乗って爵位を掠め取り、それで貴族院議員にもならんかった腰抜けは——幼子の頃一度、更に長じてから二度、その鷺の母に行き遭ったのだそうだ」

あの、館の建っている場所で——と老人は云った。

「あの館と仰いますと、あの、白樺湖の」

「そう、あの館だよ。あの、儂の莫迦な兄である公篤が莫大な借金をして建てよった——儂が幽霊に逢うた、あの館だ」

私が六年間足繁く通った館である。

「まあ、以前は彼処にゃあんな湖はなかったのだ。あれは人造湖だからな。彼処は、ただの荒地地だった。地の果てみたいな処だったよ。親父はその荒地地で青鷺に遭ったのださうだ。何でもこう、神神しく光る女が、青鷺に変わって飛び去るのを、間近に見たのださうよ」

「じゃあ、あの館は、その聖地たる記念の場所に——」

違う違うと老人は手を振った。

「どうやら兄貴は勘違いをしたようだな」

「勘違い——ですか」

「大きな勘違いよ。親父は驚の話は誰にもしなかつたらしい。黙して墓まで持つて行ったのだ。まあそりゃあ賢明な選択だったと思うがな。吹聴なんぞしとつたら癡狂院行きは確実だ。兄貴は、ただその場所に何かあると云うことだけを嗅ぎ付けたんだ。ほれ、あの土地には何か宝物があると云うような、妙な噂があるだろ。兄貴も宝が埋まつてるとでも思うたのさうさ。風聞通りよ。まあ、正に大莫迦だわな。あの人は、私塾を開いて儒学を教えとつたんだが——経営は行き詰まつつたのだ」

貧すれば鈍すだと老人は笑った。自嘲的な笑い方だった。

「儒学が何の役にも立っておらん。何処が儒者だ。儂は俗物だがな、それでも孔子の教えは身に染みておるぞ。実生活に役立てられなきや、学問などするだけ無駄だ。借金するために学んでおるようなものじゃないか」

そこで老人は立ち上がって文机の前まで進むと、古文書の山を探って一枚の紙切れを抜き出した。

「まあな、莫迦な兄のその塾も、明治十年頃はまだ軌道に乗つとつたようだな、その時分のことださうだがな」

老人はそう云い乍ら座に戻り、私に向けて手にした紙を差し出した。浮世絵のようなものだった。

「錦絵新聞だ。瓦版と新聞の中間のようなものだな。儂が若い頃は、こう云うもんがまだあったのだ。今の新聞は素っ気ないがね、当時は多色刷りで、そうした挿絵が刷られておつてな、面白かった。これは『東京繪入新聞』だな」

悪党面の僧侶を官憲らしき出で立ちの豪傑が縛り上げている絵面が刷られている。周囲には大袈裟な身振りと勿怪顔で驚きを体現した者達が数名描かれていた。見出しには、『祕密の怪談會にて稀代の殺人狂お縄になる』とあった。

「これは——何です？」

「だから新聞だ。当時の一等巡査が、殺人鬼を捕らえたと云う記事だな。問題なのは、その場所だ。宴席のような絵だろうよ。見出しにもある通り、それは怪談会だそうだ」

「怪談会——とは、何ですか」

「そのまま、怪談語る集まりよ。百物語怪談会だ」

「怪談と云うと、その、化け物なんかの出る——お岩さんのような話ですか」

物語りだよと老人は云った。

「今の者は知らぬのかな。その、百物語ちゅうのはな、夜中に集まってな、怪談を百話、語るのだ」

「百もですか」

「そう。それでな、こう行燈あんどんに青紙を貼って、燈芯を百筋油に差しておく。一話終わる毎に一本芯を引き抜くのだな」

「すると、徐徐に暗くなりますね」

「そう。怪談が一話終わる毎に、部屋はどんどん暗くなって行くのだ。百話終わると真っ暗になって——」

怪しいことが起きる。

老人はそう云った。

「怪しいことですか。それは——」

「それは判らん。幽霊が出るのかもしれない。怪物が出るのかもしれない。いやいや——まあそんなものは出ぬわ。さつきも云うたが、幽霊なんて居らんだ。だから、まあ、何も起きはせんのだろうよ。でもな、平田。平田君。怪談と云うのは、お前の云う通りどれも幽霊が化けて出るような話なんだろうさ。ひゅうどろどろと、女子供を怖がらせるあれだな。そんなものを蜿蜿えんえんと聞かされて、だ。それで、周りがどんどん暗くなって来たなら、だ。多少は妙な気になるもんだろうさ」

まあ、それはそうかもしれない。

ただ、私はそう云う話が百通りも語れることの方が、先ず以て奇異なことであるように思えた。

「そのな、百物語怪談会を催もよおしたのだそうだ」

「何方どこが——です？」

「兄貴の塾がだ」

「塾って、儒学の塾なのではないのですか？」

「そうなんだよ。そこが莫迦まがなのだよ。儒者は怪力乱神かいりよくらんしんを語らずと云うだろうが。ところが、頭の悪い教え子どもが、お化けが居るの居ないと云い出した。兄貴はそんなものは居らんと云うたようだが、どうも収まらず、じゃあ百物語でもして確かめてみようかと云うことになったのだそうだ」

「それが——この絵ですか」

そう云う場面には見えぬ。描かれているのはどう見ても活劇の場面であった。

「まあ、兄貴にしてみれば、そんなことをしたって当然何も起きぬと思っておったのだろう。当たり前だな。それで愚かな生徒が心根を改めてくれるならやっても良いかと、そう考えたのだろう。ところが——兄貴の意に反して、そのような活劇が起きてしまったと云うことのようにだ」

「つまり、これがその、怪しいことなのでしようか」

怪しくないわと老人は怒ったように云った。

「その官憲は、何でも不思議巡査と綽名おなされる名物警官だったようで、その酔狂な座興の幹事をしていたのだな。そうしたら偶然、出席者の中に凶悪犯が交じって居ったのだ。それだけのこった。ただなあ平田」

平田よと老人は呼ぶ。

「この話はな、親父の日記にも記されているのだよ」

「公房卿も記されておられるのですか」

「だがな、どうも様子が違うのだ」

「違うと云うと——」

親父も参加していたらしいと老人は云った。

「その。百物語とやらにですか」

「そうなのだ。まあ、こうした逮捕劇は事実あったようなのだがな、親父の記述だと——」
物語は百——語られたのだ。

「遣り遂げたと云うのですか」

「そう。百物語は成ったのだと、親父は記しておる」

「すると、怪しいことが起きたと云うのですか」

そう。

怪しいことは。

「起きたのだそうだ」

何が起きたのですと私は尋たずいた。

「父はな」

母に逢ったと老人は云った。

「御母上とは」

「だから青鷺よ。百話目が終わると同時に、青鷺の母が顕現なされたのだと——由良公房は記しているのだ」

「しかし」

私は錦絵新聞に視軸を落とす。

「そんなことは書かれていませんが」

「そう。儂も何度も読んだ。新聞には活劇のことしか書かれてはおらぬ。どうもな、その母の姿は——親父にしか見えなかったようだよ」

「それでは」

幻覚だ。

否——。

違うのか。

それは昔のことなのだ。

しかも、それは物語なのである。

嘘も実もないのだろう。ないのだよと、胤篤氏は云った。

「儂の親父はな、百物語の作法に則って、三度——あの世の母と逢ったのだ」

「あの世の——」

「あの世だ。人の子を生す青鷺など、此の世の者ではあるまいて。ならばあの世の者だ。青鷺は、物語の中から湧き出でて、親父の前に姿を見せたのだ」

老人は何処か、遠くを見ていた。

「のう、平田」

「は」

「儂はな、もう一度」

「何でしょう」

もう一度逢いたいと由良胤篤は云った。

「逢いたいと——申しますと」

「儂はな、平田。もう、昨日が多くなり過ぎて、昨日に潰されそうなのだ。儂はもう八十だ。古い先は短いだろう。儂の生はもう長いことはあるまいよ。つまりな平田、平田よ。儂の人生は」

物語の方が多くなってしまったのだ。

「そうなら——また、あの女性に逢えるのではないかと、そう思うてな」

「あの人」

幽霊だよと、老人は酷くゆっくりと云った。

「会長、あなたは」

「もう、儂は疲れてしまったのだよ平田。いいや——疲れた訳ではないのだろうな。何だかなあ、懐かしくて堪らないのだ。昔が愛おしくて堪らないのだ。儂自身が物語になってしまいたいのかもしれぬわ」

そう云うと、老人は蹠跟めき乍ら立ち上がり、電燈の紐を引いた。ぱちりと音がして部屋は暗くなった。老人はそれからそろそろと歩を進め、次の間に続く襖を開けた。

隣室は和室だった。

そこには調度は何もなく――。

ただ、真ん中に行燈がひとつ、ぽつんと置かれているようだった。

「青紙を貼った」

「会長――」

由良胤篤は、行燈の真横に座った。

「どうだろう。どうなのだろう平田君。百物語は――この昭和の御代でも効き目があるのだろうか。どうだろう」

老人は袂から燐寸を取り出し、行燈に火を入れた。

朦、と。

昏い座敷が、青色に映えた。

冥い部屋が、青に染まった。

「燈芯と云うのが最近はないのだ。だから蠟燭だ。しかも一本だけだからな、作法とは随分違っておるが」

上げた老人の顔は、真っ青だった。

「どうだろう平田。これで、彼岸と此岸は結ばれようか」

「そんな――」

私は立ち上がった。

そんなこと、する必要はない。

何もしなくていい。此の世には物語が溢れているのだ。一人一人に。一日一日に。一冊一冊に。

凡てに物語がある。

今は、直ぐに今でなくなる。昨日だ昔だと、そんなものを持ち出すまでもない。

今と云うのは、一瞬しかない。

否、一瞬もない。

今この時と云った時、もうその時は過ぎていく。

ならば。

「会長、いや、由良さん」

今この時が、もう物語なのじゃないか。

記憶などせずとも、記録などしなくとも。

そう。空欄には妹の名を書き入れよう。この私自身が書き入れよう。此の世には存在しなけれど、あの世には存在するかもしれないのだし。いや、きつと物語の中には居るのだ、居るのだろうか。だから私は、妹など居ないのに――。

居るような気がするのだ。

私の物語を綴るのは私だ。

「いいんです。そんな作法は必要ないのです。私も、あなたも、もう——」

私は行燈の傍まで歩み寄り、真上から覗き込んだ。

幽けき炎が揺れていた。

私は。

その炎を、吹き消した。

ふ、と。

真っ暗になった。

闇の中に——。

何かが見えた気がした。勿論、気がただけである。

でも。

あれは、きっと女だ。女だった。

「会長、ご覧になりましたか」

あれは、あなたが逢いたかった幽霊じゃないのですか。

五十年前にあなたが逢った、もう疾うに亡くなってしまった、あなたの好きな——。

あの人じゃないのですか。

由良胤篤は暫く呆然としていたが、やがて、

「平田、平田君」

と私を呼んだ。

「今のは、今見えたのは——」

お前の妹さんだろう？

「いもうと——」

私は。

慌てて元の部屋に戻り、電燈を点けた。人工的で鄙俗しい明かりが幾度か明滅し、すぐに

部屋に満ちていた物語を一瞬で彼方へと追い遣った。

老人は。

放心していた。

いもうとなど。

わたしにはいもうとなどいないんだ。

私——。

平田謙三が物語をすっかり失ってしまったのは、昭和二十八年秋のことである。